

中島与老幼

奇

30

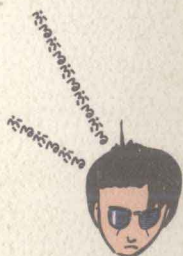
3



L.



富





中 島 与 志 的

・ 子 子 子 子 子

子 子 子 子 子



異能作品集



著者略歴
一九五二年生
主要著書
「頭の中がカユいんだ」
「明るい悩み相談室」など

中島らものぶる・ぴいぶる

一九八八年二月一日
一九八八年二月十五日
発行印刷

著者 © 中 島 ら も

発行者 高 橋 孝 純

印刷者 山 岸 真

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部(三)七八二一
編集部(三)七八二一
振替 東京 九一三三二八
郵便番号 一〇一八

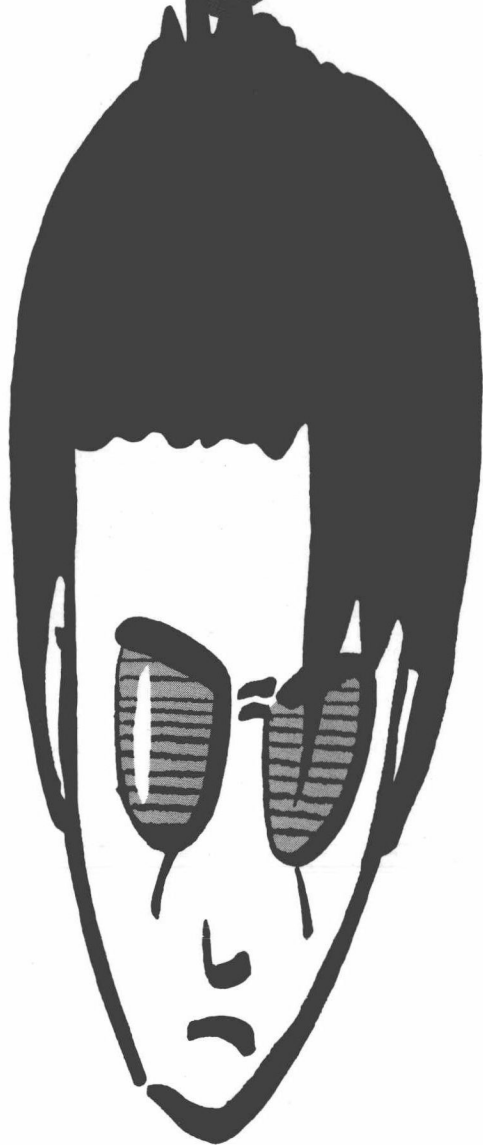
三秀舎印刷・加瀬製本

ISBN 4-560-04908-4

も

く

じ



そめ 1 5

落語

まんたらさんけ
曼陀羅散華
神も仏もアルマジロ

あとがき

COVER ILLUSTRATION
COVER DESIGN&ART DIRECTION
TITLE LETTERING

RAMO NAKAJIMA
TAKAHIRO EGUCHI&TBREK
HIROYUKI HIRAYAMA

216

そめ 2 57

ゴキウ

おしごとふるふる
おうちでふるふる
おそとでふるふる

ふるふる 1 13
ふるふる 14 20
ふるふる 21 34

96 86 58

そめ 3 131

小説

フレイムレス・TV

132

中島らもの
ふるふる・ぴいふる

— 異能作品集 —

その 1 .. 新作落語

まんだらさんげ
曼陀羅散華

枕、おもにお医者さまの話、病氣の話などあつて、

さて、我々こうして上方に住んでおりまして、お医者さまで名のある方といわれますとまず頭に浮かびますのが緒方洪庵の名前でしような。北浜の資生堂大阪ビル。あのひとつ裏手の道に「適塾」という古い建て物が今も保存されております。これが緒方洪庵が開いた塾の跡でございます。天保九年と申しますから一八三八年、今からちょうど百五十年前、この塾を開きまして、ここで医学、蘭学なんかの当時としては最先端の学問を教えておったわけでございます。この適塾からは福沢諭吉ですとか大村益次郎、大鳥圭介ですとかの後世に名を残す人物がたくさん巣立っております。

ま、今行ってみますとこの適塾いうんは昔の建て物やいうだけでしようもないところですが、当時は上方の学問の中心やいうことでたいへんに活発な出入りのある塾やったようです。人の出入りが激しいもんですから、しまいには塾の前に物売りまで立つというにぎやかさでして、「適塾まんじゅう」なんてもんを売っていましたな。「そんなしょうもないもん誰が考えたんじやい」言われましたら、「へえ緒方が考案した……」……これは私が考えたんと違いますよ。台本にこう言えと書いてあるから忠実に演じたまででございまして。これはその頃のお話でございます。

左内 先生、お呼びでございましょうか。橋本左内、これに参じましてございます。先生？……洪庵先生？

洪庵 そこじやいつ！

(ヒューイン、カッーン！)

左内 あいたたたた。いきなり硯^{すずり}投げよった。先生、無茶せんといってくださいよ！

洪庵 おお！ そちや橋本左内ではないか。

左内 ですからさつきからそう申し上げておるではございませんか。

洪庵 いや、すまぬすまぬ。わしは氣配がしたので、てつきりまた蚊がはいってきたのかと思うた。

左内 先生。蚊と弟子の区別くらいつけてくださいよ。

洪庵 や、面目ない。わしはこのほか蚊が嫌いでの、あのぷうーんという羽音がするとイライラして学問にさわる。(ぷうーん、パシッと自分の肩を叩く) おのれ逃げおったか。ん？ おお、左内、そのまます刻動くでないぞ。ていつ。(パシッと左内の頬を張る)

左内 あいたっ！

洪庵 おのれ、また逃げられたか。羽虫のぶんざいで卑怯千万。何じゃ、左内、その恨めし気な目つきは。

左内 いや、お呼びがあつて参上いたしましたら、いきなり硯はぶつけられるわ、頬は張られるわで……。わたくし何かいたしましたですか、それならそうとはつきりおっしゃってくださいませ。

洪庵 いやいや、他意はない。文句があるなら蚊に言つてやつてくれ。こら、泣くな、泣くなというに。涙を拭け。

左内 (鼻をすすりつつ) はい、先生。

洪庵 血も拭け。

左内 え？ 血が出ておりますか？ わつ、ほんまや。どないしましよ、先生。

洪庵 痛いの痛いの、飛んでいけーっ！

左内 ……。先生。先生はほんまにお医者さまですか？

洪庵 師を疑うてどうするか。ところで左内、わしに何か用か。

左内 いや、先生が呼びになられたから参上いたしましたので。

洪庵 はて、そう言われれば何ぞ用事があつたような気がするが……。おお、そうであつた。

左内 何でございましょう。

洪庵 用というのは他でもない。これ、この書状をな、急ぎ届けてもらいたいのだ。

左内 書状をでございますか。して、いづかたさまに。

洪庵 うむ。土佐堀にな、ご同業で診療所を開いておられる、八瘤米明斎はちこぶせいめいさいという方がおられる。この方

はな、古今東西の薬学薬理に通じたお方な、こと薬に関してはこのわしも頭があらぬほどのお人
じゃ。

左内 ほう。先生でも頭のあがらんほどの人がおられますか。世の中というのは広いものでございませ
ねえ。

洪庵 その八瘤米明斎殿にお願いしてな、この書状に書き示しておいた薬をば処方していただき、それ
を急ぎ持ち帰ってもらいたい。たのまれてくれるかな。

左内 はつ。かしこまりましてございます。土佐堀、八瘤米明斎先生でございませぬ。

洪庵 おお、しかとたのんだぞ左内。あ、それからな、これはひとつ（妙なことを言うと思うかも知れ
んがな……）。

左内 はい、何でございましょう。

洪庵 この米明齋という先生はな、たしかにこのわしも及ばぬ碩学せきがくのご仁なれど、学理を深ふかう究めんとするあまりに、物の考え方に尋常でないところがある。まことの道を踏みはずして、何やらこの世のものでない奴やつばらと通じておるといふもつばらの噂のある方じゃ。若いおぬしには興の湧くことでもあろうが、ゆめゆめ道をたがえてはならんぞ。耳かたむけてはならんぞ。よいな。

左内 は。しかと心得ましてございます。

洪庵 それにもうひとつ。米明齋どのは娘ごと二人暮らし。ちようどおぬしと同じ年になろうかの、十七、八になる娘ごがひとりござらっしゃる。家からは一步も出ずに育たれたので、そのお姿を見た者もめったにはおらぬが、何でも天女もかくやというばかりの美しい娘ごらしい。そちらも年頃じやで言うておくが、そちらは将来に大望ある身、おなごに心を動かしては勉学が成らぬ。もし、おりんというその娘ごを目にすることがあつても心を動かすことはならんぞ。よいな。

左内 は。肝に銘じておきます。

洪庵 よし。では行くがよからう。

左内 はい。行て参じます。

書状をふところに入れてしまして橋本左内、適塾を後にいたしまして土佐堀へ向かいます。真夏の昼さがり。その頃の大阪と言いますと「なにわの八百八橋」「水の都」と言われております通り、堀割り、

用水路が縦横に流れておりまして、見た目には涼し気ですが夏日にはゆらゆらとかげろうが立つくらいで湿気が多い。おまけに水が多いと蚊も多い。今の大阪の比ではございません。汗をぬぐい、寄ってくる蚊を追いたたきながら、ようよう土佐堀のあたりまで参ります。

左内 ああ、今日はまた蒸すこつちやなあ。(パチツと蚊をたたき) こんな日のお使いは……(パチツ) 小銭でもやってどこぞの子供衆に……(パチツ) たのめばええものを……(パチツ) あれあれ、どうも虫が多いと思ったら、見てみいな、あんなところに蚊柱が立つてござる。あらつ、こつちへ向こうてくるがな。しつ、しつ。わあ、こらたまらんわい。

蚊柱に追い立てられるようにして小走りに走りましたが、運の悪いことに曲がつた角の先がどん詰まり。

左内 あらあ、行きどまりやないかいな。それにしてもこら立派な家やな。白木の看板が出とるな。何なに、「万よろずやまいお見立て、八瘤米明斎」。おう、ここじゃがな。奇なことあるものじゃ。虫の知らせとはこのことか。どれ、ご免くださいませ。ご免くださいませ。どなたかおいでやございませんか。ご免くださいませ。

米明 誰じやいな。玄関先で大声を出すのは。医者のところでもないな大声を出すもんでもない。病人がおつたらさわるであらうが。

奥から出てまいりましたのが年の頃なら六十いくつ、鶴のようにやせた青白い顔のご老人でございます。唇にかかるほどのワシ鼻で目が異様に赤い。その赤い目でギョロリとにらみまして、

米明 わしは米明齋じゃが、どなたかな。紹介のない者の診療はせんことになっておるのやが。

左内 あ、いや、病人ではございません。わたくし北浜適塾の緒方洪庵先生方にて医術を学びます橋本左内と申す者。先生よりことづかりました書状を持って参上いたしました。

米明 何。洪庵のところから。どれどれその文をよこしなさい。どれ、ふむ、ふむふむ。なるほどあいわかつた。では藥を処方するでな、多少の時間がかかるが、よいかな。ふむ、ここでは何じやで奥へ通りなされ。

招じ入れられましたのが、米明齋の研究室でございましょうか、十畳ほどの大部屋に南蛮様の大机、その上に地球儀やら薄気味悪いしやれこうべやら何かの乾し草のような物やらがのつておりまして薬研が四つほどあります。三方の壁は全て棚造りになっておりまして、その棚にはズラリとギヤマンの

壇。中には何やら液体に漬かったトカゲや虫、その他動物やら植物やら判じかねるような、見たこともないものがところせましと並べられております。部屋の中はツンと鼻にくる、すえたような甘い匂いが満ちておりまして、珍し気に見まわしておりました橋本左内、しばらくするうちに、何やら胸がむかついて頭にぼんやりと霞がかかったような妙な気持ちが出てまいります。

左内 や、米明齋先生。これはまた、見たこともないような珍なる物ばかり、眼福に存じます。

米明 ほっほ。そりやま、洪庵のところにおつてはこういう物は見られまいよ。あれは仁術じゃの何のとごたくが多うていかん。頭の固いことじゃ。

左内 米明齋先生。ここのこの壇にはいつておるのは、これは何でございますか。

米明 それか。そおれえはあねえっ!!

左内 わつ、先生。気持ち悪い近づき方せんといってください。

米明 そうか？ それはな、「冬虫夏草」というて、生きた虫にとりついて生えるという珍らしい茸じゃ。

左内 ほう。これが冬虫夏草でございますか。すれば、これは何でございましょう。

米明 ん？ どれかな。おお、それか。ふふ。そおれえはあねえっ!!

左内 わつ、それやめてください言うのに。

米明 ……そうか？ それはのう、「紅茶キノコ」というて、万病に卓効ありとされる不思議なものじゃ。

左内 ほお。これは奇な物。しかし、これを見てますと、私なぞかわかりませんが恥ずかしいような気持ちがいえますが……

米明 そうじゃろう、そうじゃろうとも。どういうわけかはわからんのじゃが、この紅茶キノコを見ると恥ずかしそうな顔するもんが特に中年に多いな。

左内 はあ、さようでございますか。米明齋先生、これは、これは何でございますか。

米明 ん？ どれじゃな。おお、それか。そおれえはあゝ

左内 やめつちゆうのに、それ。

米明 うん、もう！ 言いたいのになあ……

左内 すねるとよけい無気味ですな、先生は。

米明 そうか？ いや、それは珍しい物じゃぞ。おそらくこの世にふたつとはあるまいとに。

左内 何でございますか。これは。黒うて細長いですが。

米明 わしの鼻毛じゃ。

左内 え？

米明 あれは忘れません、三年前の五月十二日。抜いたこのわしがびっくりして思わず捨てたほどの、